



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オープンカレッジにおける学生ボランティアの学び : 知的障がい者の学びをサポートする学生の感想から
Author(s)	淀野, 順子; Yodono, Junko; 永須, 環 他
Citation	社会教育研究, 30, 101-111
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49205
Type	departmental bulletin paper
File Information	Yodono.pdf



オープンカレッジにおける学生ボランティアの学び

—知的障がい者の学びをサポートする学生の感想から—

淀野 順子*1・永須 環*2・竹内 啓祥*3

目 次

1. はじめに	101
2. 拓殖大学北海道短期大学におけるオープンカレッジ	102
(1) 拓殖大学北海道短期大学における概要	102
(2) 運営実態	103
3. 調査方法	104
(1) フィールドの概要	104
(2) 調査の実施状況	104
4. 学生ボランティアの感想	105
(1) 学生ボランティアの属性	105
(2) 知的障がいのある人の学びの場のイメージ	105
(3) 講座内容について	105
(4) サポーターの存在意義	106
(5) 良かったこと、嬉しかったこと	106
5. オープンカレッジにおける学生ボランティアの学び	107
(1) コミュニケーション	107
(2) サポートの仕方	108
(3) 人との関わりからの学び	108
(4) 運営に関する感想と学び	109
6. まとめ	109

1. はじめに

「学ぶ権利」は学習権宣言の採択から確認できるように、誰しにも保障されているべきものである。しかし、実際には、対象である学習者は広く一般の人が想定され、多くの人が学ぶ権利を保障されることを前提として組み立てられている。そのため、知的障がいのある成人のような、ある特定のニー

*1 拓殖大学北海道短期大学助教 *2 拓殖大学北海道短期大学2年 *3 拓殖大学北海道短期大学1年

ズを持った学習者の存在は周縁的に位置づけられがちである。このような現状において、知的障がいのある人の学習は、行政による制度的保障が十分ではないため、さまざまな立場の人々・組織によって実践が試行錯誤されている。

高等養護学校を卒業した後の知的障がいを持つ人に対して、鳥取大学付属特別支援学校をはじめとして、いくつかの府県で専攻科を設置している。しかし北海道を含む多くの都道府県には、知的障がいを持つ成人の専攻科における学びの場がないのが現状である。このような現状を受け、札幌市の自立生活訓練事業所では「チャレンジキャンパス・さっぽろ」として2011年3月に「まなびの作業所」が開設された。

知的障がいのある人の学びの場は、行政による制度的保障が十分ではなく、各地で社会教育施設や社会福祉施設などを会場として、さまざまな立場の人によるボランティアに支えられている活動がある。しかし、近年は上述したような実践が各地で増えつつあるものの、限られた支援者・組織による実践であることが課題の一つであると言わざるを得ない。

北海道では、高等教育機関における知的障がいがある人の学びの場であるオープンカレッジについては、北海道医療大学と、筆者らが実施する拓殖大学北海道短期大学の2校で実施されているのみである（淀野・牧野：2011）ⁱ。

本稿では、事例として拓殖大学北海道短期大学で実施しているオープンカレッジにボランティアとして参加した学生を対象に行ったアンケートの記述および聞き取りによる回答から、活動への参加を通じて何を学んでいるか、またどのような意識変容を経験したかを明らかにする。この取り組みでは、ボランティアがスタッフ・サポーターとして学生が多く参加し、参加を通じて学生ボランティア自身もまた「学び」を得ている。本稿ではボランティアの「学び」の内容を具体的に明らかにすることにより、活動に参加することの意義を確認し、多様な市民の参加の支援により知的障がいを持つ人の学びの場を広げていく可能性を考察したい。

2. 拓殖大学北海道短期大学におけるオープンカレッジ

（1）拓殖大学北海道短期大学における概要

拓殖大学北海道短期大学（以下、拓殖短大）は、北海道のほぼ中央部の人口約23500人ⁱⁱの深川市に立地し、環境農学科・経営経済科・保育科の3学科を有している。

拓殖短大では、知的障がいのある人を対象とした学習の場であるオープンカレッジを2007年から2011年まで、年1回計5回実施してきた。2007年から2010年までの4回は、深川市内の知的障がい者施設「ふれあいの家」の利用者から受講者を募り、拓殖短大にて実施した。2011年については、同市内の知的障がい者施設「あかとき学園」の利用者を対象として、「あかとき学園」に出前講座という形式で実施した。

拓殖短大におけるオープンカレッジには、「ふれあいカレッジ」「にじいろキャンパス」「ゲンキカレッジ」があるが、本稿では、学生ボランティアが深く関わる「ふれあいカレッジ」および「にじいろキャンパス」を取り上げ、これらの総称として「オープンカレッジ」の語を使用する。

(2) 運営実態

拓殖短大におけるオープンカレッジについては、実行委員会を設立し、実質的にはボランティアサークル「かたつむり部」が中心となって実施している。

2007年から2009年までの3回は、深川市内の知的障がい者施設「ふれあいの家」の利用者を対象として、「ふれあいカレッジ」という名称で実施したⁱⁱⁱ。オープンカレッジの企画・運営を中心的に行ったのは、実行委員会の事務局長であるボランティアサークル顧問で、講師には拓殖短大の専任および非常勤講師を迎えた。

2010年のオープンカレッジは、実行委員会を設置し、事務局長にボランティアサークル顧問が就任したが、事務局員であるボランティアサークル所属学生と企画・運営を行い、講座の一部については講師を学生ボランティア（スタッフ）が行うなど、学生が中心となって実施した。このような実施態の変化にともない、名称を「にじいろキャンパス」と改めている。

2011年の「にじいろキャンパス」については、学生ボランティアを、運営などを行うスタッフと、開催当日に受講者につくサポーターとに分け、より学生ボランティア自身による実施を試みた。スタッフは事務局に属する「かたつむり部」の部員（主に部役員）であり、知的障がい者施設との打ち合わせといった企画段階から、講座内容の選定・企画、サポーターの募集、シラバスなどの配布資料作成など、さまざまな事前準備を行った。またオープンカレッジ開催当日は、サポーターオリエンテーション、当日の運営、講義講師などをスタッフ自身で行った。開催当日は、受講者である知的障がい者施設利用者にサポーターがついたものの、スタッフも時に応じて受講者のサポート役についた。

「にじいろキャンパス 2011」の開催日の実際の運営は表1のようなスケジュールである。

表1 「にじいろキャンパス 2011」スケジュール表

9:10	集合	ボランティア集合 サポーターオリエンテーション	
9:45	移動	拓殖短大からあかとき学園へバス移動	
10:00	会場設営	あかとき学園と最終打ち合わせ・会場設営	
10:15	開講式	日程説明・開講のあいさつ	
10:30	1時間目	<工作>「落ち葉でアート」	
11:10	2時間目	<体育> 「音楽で変身しよう」	<工作2> 「ラミネート加工をしよう」
11:30	閉講式	感想発表・作品授与・閉講のあいさつ・写真撮影など	

11:40	会場片づけ	あかとき学園にお礼挨拶・会場片付け
11:45	移動	あかとき学園から拓殖短大へバス移動
12:00	解散	ボランティア反省会・解散

3. 調査方法

学生ボランティアとして参加することによる「学び」の内容について具体的に明らかにするために、オープンカレッジに参加した学生ボランティアを対象として質問紙調査を実施した。また学生ボランティア（スタッフ）が企画運営・講師を務めた「にじいるキャンパス」については、質問紙調査に加え、補足的にスタッフに聞き取り調査を実施した。

（1）フィールドの概要

オープンカレッジに参加する受講者は、2007年から2010年までは知的障がい者施設「ふれあいの家」の利用者およびその子どもであり、参加者は例年約25名だった。2011年は知的障がい者施設「あかとき学園」で出前講座を行い、約60名が受講した。受講者の年齢層は、20歳代前半から60歳代まで幅広く、障がいの程度は「軽度」「中度」の人がほとんどである。

ボランティアは拓殖短大の学生で、ボランティア人数は例年約25名である。ボランティアの多くがボランティアサークル「かたつむり部」の部員であるが、部員以外の希望者もサポーターとして参加している。拓殖短大の保育科では、保育士資格取得を希望する学生が8月に10日間の施設実習を行うことになっており、実習で知的障がい者施設に行く学生もいる。そのため、ボランティアのうち保育科の2年生については、知的障がい者と関わった経験を持つ場合が多い。

（2）調査の実施状況

調査紙の質問項目には、個人属性のほか、ボランティアの学びを記述しやすいであろうと考えられる項目を設定した。本稿で用いる記述調査の実施時期は、1回目は2007年10月（18部配布、12部回収、有効回答率66.7%）、2回目は2010年12月（20部配布、16部回収、有効回答率80%）、3回目は2011年11月（32部配布、28部回収、有効回答率87.5%）である。調査紙は、オープンカレッジボランティアとして参加した学生に配布し、任意記名式で直接回収した。アンケートを複数回実施したのは、実質的なオープンカレッジの企画・運営者が、ボランティア顧問から学生ボランティアへと移行した経緯と、講師が本学教員（専任教員および非常勤講師）から学生ボランティアへと移行した経緯があるためである。これらの移行が、学生の学びにどのような影響を及ぼしているのか、今後、明らかにすることを意図している。以下で述べている数値は、特別に記述がない限り、単純集計の結果である。

4. 学生ボランティアの感想

(1) 学生ボランティアの属性

2007年、2010年、2011年の3回のオープンカレッジにおける学生ボランティアの学年は、1年生が50%（32名）、2年生が50%（32名）であった。

本学は2年生の短期大学で、環境農学科、経営経済科、保育科の3学科体制であるが、ボランティア学生の所属学科は、保育科61名（95.3%）、経営経済科3名（4.7%）であり、圧倒的に保育科学生が多いことがわかる。これは、保育科学生の社会福祉についての関心の高さがオープンカレッジへのボランティア参加に影響しているためと考えられるが、一方で、他学科の学生への参加の呼びかけや活動そのもののPRなど、活動を広げていくことが課題ともいえる。

男女比は、女性が50名（78.1%）、男性が14名（21.9%）で、ボランティアの8割近くを女性が占めている。これは、ボランティア学生の多くが保育科に所属する女子学生であるためである。

ボランティア経験については、オープンカレッジがはじめてであると回答した者が19名（33.9%）で、オープンカレッジ以前に1～2回経験した者が最も多い26名（46.4%）であった。何度もボランティアを経験している者は11名（19.6%）いることから、ボランティア意識が高い者がオープンカレッジに参加しているとも言える。（以下、「」内の斜体は調査紙の記述回答からの引用。（）内は、学年、性別、スタ（スタッフ・事務局）、サポ（サポーター）を示す）。

(2) 知的障がいのある人の学びの場のイメージ

知的障がいのある人の学びの場について、「大学などで学科が準備されるべき」20名（38.5%）、「大学などが工夫して準備すべき」31名（59.6%）と、学びの機会が準備されるべきであると回答したボランティアがほとんどで、「学ぶ機会がなくてもかまわない」と回答した者はいなかった。ここから、ボランティア学生は、知的障がいのある人にも、学びの場が保障されるべきであると考えていると言える。学びの場の内容については、大学などの高等教育機関に学科を準備するべきと考える者が多いものの、「定期的に障がい者さんが学べる場があればいい（1年、女、スタ）」「障がい者さんが私達学生と同じように学ぶことになると、生活や身体への影響が出る可能性があるので、今回のようなことを定期的にしたら良いと思います（2年、女、スタ）」と、イベント的な定期的な学びの場を増やすことが好ましいと考える者もいた。

(3) 講座内容について

「時間配分は適切だったか」という質問項目について、回答数が多い順に「とても」が27名（48.2%）、「まあまあ」が15名（26.8%）、「ふつう」9名（16.1%）と続き、「とても」「まあまあ」の合計は75%に達していた。そのためボランティアはおおむね時間配分が適切であったと捉えていることが分

かった。しかし一方で、「あまり」と回答した者が2011年の学生ボランティアに3名(5.4%)、無回答だったものが2名(3.6%)いた。これらの回答の理由としては、「もう少し開講時間を長くすれば、利用者さんとの交流もより密になると思います(2年、女、サポ)」というものであった。この回答は2011年の「にじいろキャンパス」の学生ボランティアからの指摘であるが、2011年は施設から午前中のみの実施を希望されたため、午前中に2講座だけを開講せざるを得なかったという経緯がある。2007年から2010年までの4回は、拓殖短大での開講だったため昼食をはさんだ長時間の開講が可能であったことから、実施施設との関係を重視しながら、開講時間や出前講座といった開講形態については、今後も検討・調整が必要であると言える。

「内容は適切だったか」については、「適切だった」が31名(57.4%)、「まあまあ適切だった」が22名(40.7%)とほとんどの者が回答し、「普通」は1名(1.9%)にとどまった。「あまり適切ではなかった」「全く適切ではなかった」と回答した者はいなかった。

講座内容については、「ボール渡しゲームなど触れ合う講座をすれば、親近感がもっと湧くと思います(2年、男、サポ)」という意見のほか、2011年の出前講座のみに参加した学生ボランティアからは、「大学内に呼べば、もう少し違うことができたのかなと思いました(2年、女、サポ)」のように、施設・設備によるオープンカレッジの内容の制約についての指摘があった。また、「内容については、あかとき学園さんで行うのであれば、もう少し難しいものでも大丈夫かなと思いました(2年、女、スタ)」利用者の障がい程度と講座内容を照らし合わせた指摘もあった。

(4) サポーターの存在意義

質問項目のうちサポーターの存在を「必要とされた」と感じたのは36名(69.2%)で、「必要とされなかった」と感じたのは15名(28.8%)だった。「必要とされた」と感じた理由としては、「受講者さんが自分でのりを葉っぱにつけずにいた時に手伝った(1年、女、サポ)」「スタッフの説明だけでは理解しにくいことを、サポーターがもう一度説明すると分かってもらえた(2年、女、サポ)」などのように、作業の困難などを補う形でのサポートの必要性をあげた者がいたほか、「見てほしいようだったり、サポーターと楽しそうに会話していたので(2年、女、スタ)」など、サポーターが受講者とコミュニケーションを図ること自体がサポーターの必要性の一つであることをあげた者もいた。

「必要とされなかった」と感じた理由としては、「(受講者が)自分で全部できていたから(1年、女、サポ)」「自分があまり援助をしなくても、受講者さんはほとんど自分でできていたのに驚きました(1年、女、サポ)」のように、受講者の障がいの程度によることが大きいと考えられる。

(5) 良かったこと、嬉しかったこと

学生ボランティアが楽しめたかどうかについては、「とても楽しかった」と回答した者が40名(74.1%)と圧倒的に多い。また「まあまあ楽しかった」と回答した者が12名(22.2%)、「普通」と

回答した者が2名(3.7%)おり、「あまり楽しくなかった」「全く楽しくなかった」と回答した者はいなかった。

一方、学生ボランティアから見た受講者については、「とても楽しんでいた」と回答した者が32名(57.1%)、「まあまあ楽しんでいた」と回答した者が17名(30.4%)おり、「とても楽しんでいた」「まあまあ楽しんでいた」と回答した割合は87.5%に上ることから、受講者が楽しんでいたと実感するボランティアが多かったと言える。以上から、ボランティア自身にとっても、受講者にとってもオープンカレッジは楽しいものだと捉えられていると言える。

「また参加したいか」という質問項目には、「とても参加したい」が44名(78.6%)、「まあまあ参加したい」が8名(14.3%)、「普通」が2名(3.6%)と回答があった。「あまり参加したくない」「全く参加したくない」と回答した者はいなかった。これらの回答結果は、ボランティアとして参加した学生のほとんどが、オープンカレッジでのボランティアに楽しさや意義を見出していることの表れであると考えられる。

「どこの施設の利用者さんも、同じように元気で明るくてかわいくて、すごく何気ない会話でも楽しかったです。将来のための経験となりました(2年、女、サポ)」「受講者さんは良く笑う人が多かったのを感じた(1年、男、サポ)」「とても楽しくて、参加してよかったと思いました。障害の方といると、とても楽しいです(2年、女、スタ)」など、障がいをもつ人の笑顔が、ボランティアの楽しさとなっている記述も非常に多かった。

「とても楽しかったです。将来、施設へ勤めたいという気持ちが大きくなりました(1年、女、サポ)」「施設で仕事をするのも良いなと感じることができました(1年、男、サポ)」と、将来の職業選択に関わらせてオープンカレッジを捉えている学生ボランティアがいることも明らかになったiv。

5. オープンカレッジにおける学生ボランティアの学び

本調査の質問紙のうち、オープンカレッジに参加して感じたことや学んだことについて、例年、最も多く記述されている。特に、受講者とのコミュニケーションについての記述が多い。

(1) コミュニケーション

「どのように障がい者さんと関わったらよいのか(1年、女、サポ)」と戸惑いを感じた学生ボランティアがいたほか、「人に説明すること、コミュニケーションを取ることの難しさや楽しさを学びました(2年、女、サポ)」「自分のコミュニケーション能力がないことを改めて実感しました(1年、男、サポ)」と自分自身を振り返る記述が多い。

「受講者と十分にコミュニケーションを取ることができたか」という質問に対しては、「とても」が

19名(33.9%)、「まあまあ」が25名(44.6%)、「ふつう」が9名(16.1%)、「あまり」と回答した者が1名(1.8%)だった(無回答は2名(3.6%))。この質問については、「障害を持つ方との交流の仕方を学べた(1年、女、サポ)」「コミュニケーションの取り方、相手の気持ちをどう考えるかということが学べた(1年、男、サポ)」といった、基本的なコミュニケーションの取り方についてのほかに、自分自身のコミュニケーションのあり方について、受講者との関係から記述した者が多くいた。「自分からたくさん話しかけないと利用者さんも心を開いてくれないということを改めて思った(2年、女、サポ)」「積極的に交流していくことの大切さ(1年、男、サポ)」など、積極的な働きかけの重要性については、多くのボランティアが気づかされたものであったようだ。

(2) サポートの仕方

サポートの仕方については、「その人その人に寄りよるようなサポートを行うことが大切だということ(2年、女、サポ)」「相手の気持ちを考え、行動すること(2年、女、スタ)」「ある程度のサポートをすれば、障がいのある方でもデザインなどの作業ができることや、ダンスは踊れなくてもリズムを感じることができるのだとわかりました(1年、男、サポ)」のように、受講者一人ひとりに応じたサポートをしなければならないことをあげた者が多く、「何かをしてあげるのではなく、一緒に体を動かして楽しむことも大切(1年、男、サポ)」「作品作りでは、本当に個性が出ていて、誰一人としてほかの人のまねをする人はいなく、手伝わない方が良いんだと分かった(1年、女、スタ)」という消極的サポートが時には必要であることが記述されていた。また、保育科2年次の施設実習経験をもつボランティアの中には、「実習で学んだ『手を出しすぎずに支援する』ということを中心に心がけました(2年、女、スタ)」と、意識的に消極的サポートを行った者がいたほか、「実習だと一人の利用者の方につきまきりということができませんでしたが、今回のボランティアは1対1の場面が多く持て、とても良い経験になったと思います(2年、女、スタ)」と、実習で学んだことを活かしたり、比較したりすることで、知的障がいのある人との関わり方の学びを深めていることが見受けられる。

一方で、サポートすることに熱心になるがあまり、「周囲のことをきちんと見て利用者さんに関われればよかったと思いました。前が見えていなくて頭をぶつけてしまいました(2年、女、サポ)」と失敗したことを記述し、マンツーマンのサポートのあり方だけではだめであると気づいたボランティアもいた。

(3) 人との関わりからの学び

受講生と間近に接することで、学生ボランティアは様々な場面で受講者に対するイメージを変化させたり、再確認している。「障害の程度は人それぞれで、ひとくくりにはいけないものだと感じた。障害者に対するイメージが変わった(1年、女、サポ)」と、知的障がいのある人の多様性をあげた者がいた。また、オープンカレッジ参加2回目のボランティアは、1回目の参加時に感じたことを思い

出し、「受講者も当然、一人ひとりの考え方・好みが違ったり、得意・不得意があるということを再確認しました（2年、女、スタ）」と述べている。「受講者さんにより、どのくらい参加してくれるかなど、判断するのが難しかったのですが、その感覚がわかりました（1年、男、サポ）」のように、受講者の表情や態度、接する姿勢など、受講者に対する理解の内容は多様である。

「日々の生活で、知的に障害のある人と触れ合うことはないので、ほんとうに貴重な体験となりました（1年、女、サポ）」「障がいを持った人と関わることで、自分が大きく成長できると思いました（2年、男、サポ）」のように、日常はあまり接することがない人々との関わりが、ボランティアの心に残ったことを示唆する記述も多かった。

「利用者さんが私を好きと言ってくれて、『私でもこんなに喜んでくれるんだ』と嬉しくなった（2年、女、サポ）」「最初はとても不安で怖くて、自分がしっかりできるのか心配だったけれど、とても楽しく過ごせました。『ありがとう』という言葉が、あらためて良い言葉だなと感じさせられました（2年、女、スタ）」のように、受講者によってボランティア自身の達成感や存在意義を感じることにつながっていることも確認できた。

（4）運営に関する感想と学び

「にじいろキャンパス」においては、「もう少し時間をかけて事前の確認を行ってほしい（1年、男、サポ）」「もう少し打ち合わせをしておけばよかったと思います（2年、女、サポ）」など、サポーターの事前研修・打ち合わせ不足を指摘する意見が多かった。

「利用者さん一人に対してサポーターを一人つけるようになればいい（2年、女、サポ）」「サポーター一人ひとりに役割を与える（1年、女、サポ）」のように、マンツーマンでのサポートの重要性を指摘する者も多かった。受講者1人に対して1人のサポーターがつくというあり方は、筆者らがオープンカレッジをはじめた頃からの目指すべきサポーターのあり方であった。しかし、2007年から2010年までは、おおむね受講者とボランティアの人数が20人前後と同数程度だったためマンツーマンでのサポートが可能であったが、2011年のオープンカレッジでは受講者が約60名と多く、同数程度のボランティアを確保できなかった。受講者数とボランティア人数のバランスをいかに取るかは、今後の大きな課題の一つである。

サポーターを統括するスタッフからは、オープンカレッジ当日よりも、企画・運営段階で多様な学びがあったことが述べられている。企画段階では、施設職員やサポーターといった多くの人と連絡を取り合い、話し合い、共通意識を育まなければならない。一つの物事を成し遂げるための、連絡の取りあうことや合意形成、人間関係づくりや信頼関係を築く過程そのものが、「将来、働くときに重要なもの（2年、女、スタ）」であり、社会人として働くための学びになっている。

また、「学外で行うのは初めてで不安もあったのですが、利用者さんの笑顔を見ることができて『やってよかった』と思いました。企画・運営は大変でしたが、すべてとぶくらい良かったなあと感じま

した(2年、女、スタ)」という感想からは、受講者の笑顔が達成感につながっていることがうかがえる。

スタッフが実施後に感じたこととして、「サポーターの『参加したい』という気持ちが大切だと思ったのですが、もっと利用者さんと自ら積極的に触れ合おうという気持ちが欠けている人がいたように思いました(2年、女、スタ)」と、全体を見渡した反省を述べた者もいた。実施後の反省点については、「反省点を出して『駄目だったね』で終わらせるのではなく、その理由は何だったのか、どうすれば改善出来るのか、次に実施する時にはどこを気をつければいいのかを、参加した全員で考え、意見交換して、活動に生かすことが重要だと思います」と述べているものの、反省する場が不足していたり、短期大学であるが故の引き継ぎの難しさが、オープンカレッジをより良いものにしていくための大きな課題であることを指摘する声が多かった。

6. まとめ

学生ボランティアの「学び」が具体的にどのようなものであったかについて述べてきた。オープンカレッジは、知的障がいのある受講者が主役のように捉えられがちである。しかし、運営や支援をするボランティア自身もまた「学び」の主役であることが、ボランティアの感想から明らかになった。生活様式などが違う者同士が、同じ時間と空間を共有し、「共に学ぶ」という実践の中に、「学び」の契機があると言えるだろう。

ボランティアがこのような活動に参加することの意義を「学び」という側面から意味づけていくことは、今後、知的障がいのある成人の生涯学習・教育活動に多様な市民の参加を図り、活動を広げていく上で重要なことであると考えられる。

オープンカレッジでは、「学ぶことそのもの」の保障だけではなく、さまざまな人と「共に学ぶ」ことを通して、知的障がいのある成人同士、あるいは知的障がいのある成人と支援者とのつながりをつくる場となっている。現時点で、本学で行っているオープンカレッジは、受講者自身による学習やエンパワーメントを支える活動にまで発展しているとは言い難い。しかしその契機となりうる人と人とのつながりをつくる場となる可能性を持っている。

本学におけるオープンカレッジの運営における大きな課題は、人材の確保(ボランティアや講師)、財源の確保である(淀野・牧野 2011)。制度的な保障が十分ではない中で、知的障がいがある人の学びの場を保障していくためには、地域の多様な団体や機関がネットワークを組み、多様な市民が参加して活動を支えていく仕組みをつくっていくことが必要であると考えられる。本学におけるオープンカレッジは5年目であり、まだ安定的な運営や、多様なネットワーク形成を実現できておらず、限定された団体と関係者による参加や支援にとどまっている現状にある。オープンカレッジの理念の一つ

でもある「大学の地域貢献」をいかに促進させるかという課題も大きい。様々な人々がともに時間と空間を共有し、豊かな関係性が生み出されていく場として展開するためには、今後も実践を継続する必要があるだろう。そして、様々な人々が「共に学ぶ」という活動への参加を通じて得られる「学びの豊かさ」を伝えながら、より開かれた多様な人々が参加できる仕組みを模索していきたいと考えている。

本稿では、学生ボランティアへの質問紙調査を用いたため、サポーターの学びについての記述が多く、スタッフの学びについては深く考察することができなかった。加えて、実施形態の変化・経緯と、学生ボランティアの学びの質の変化について考察することができなかった。今後は、活動展開と学びの関係性について、より深く考察し、知的障がいをもつ人を含む、すべての人の学びの保障について考えるもととしたい。

-
- i 淀野順子・牧野誠一「知的障がい者が「オープンカレッジ」にもとめること—拓殖大学北海道短期大学の実践から—」『社会教育研究第 29 号北海道大学大学院教育学研究院社会教育研究室』2011.8
 - ii 2011 年 12 月現在
 - iii 2007 年については「オープンカレッジ」の名称を前面に出し、2008 年および 2009 年については「ふれあいカレッジ」の名称を前面に出して実施した。
 - iv 拓殖短大保育科の卒業生のうち、福祉施設に就職した者の割合は、2006 年度 8.4%、2007 年度 16.4%、2008 年度 23.8%、2009 年度 33.3%、2010 年度 26.7%と、オープンカレッジ開始後から高い割合で推移する傾向がある。